

3146
4

死靈物語 復讐言安積沼

卷之四

東都

山東庵京傳著

門人

辯田泥牛校

第七條

暗夜避狼兒左九郎悶行事

并小平次於安積沼淹死事

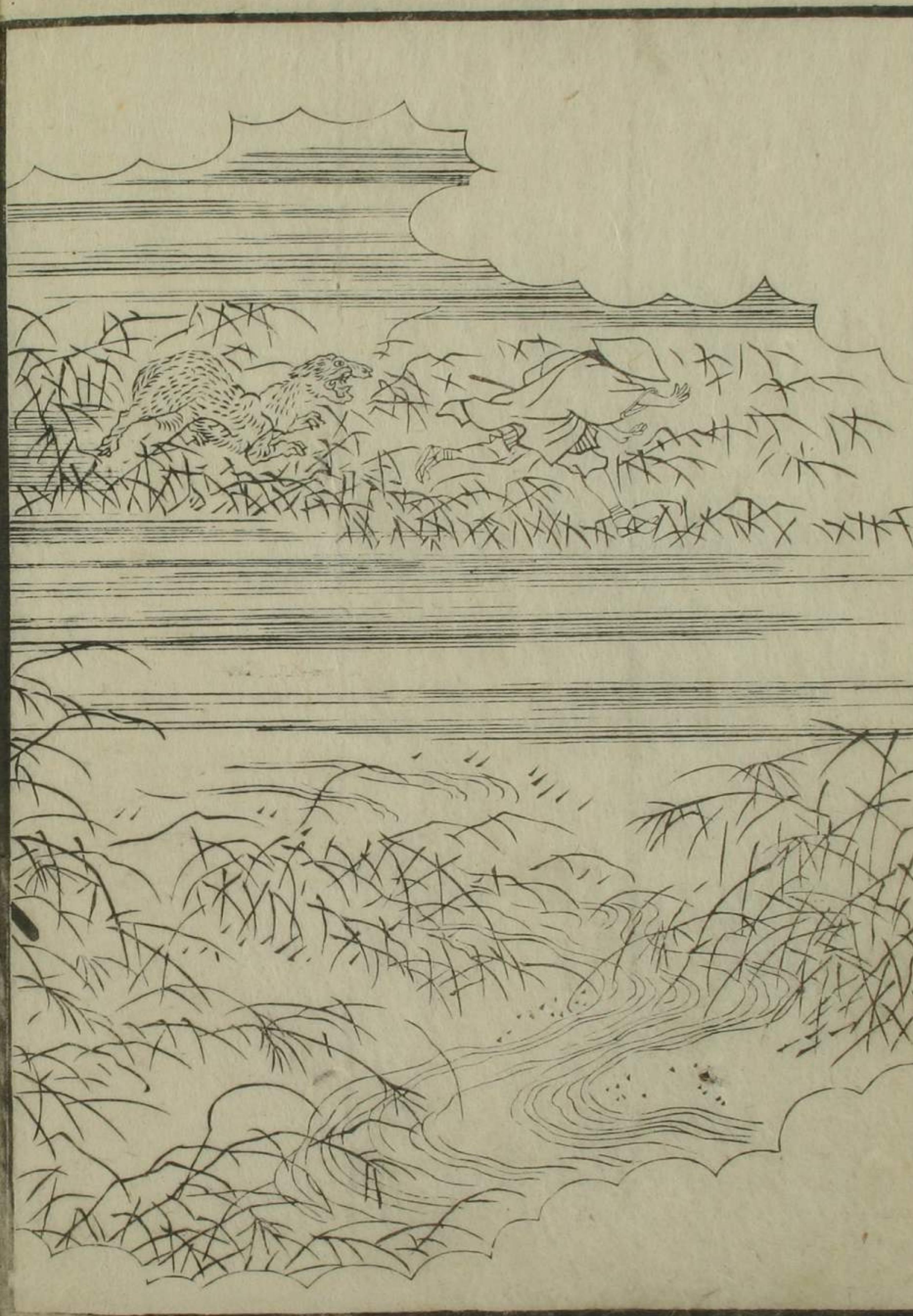
爰ふ又小龜小平次ハ。俠布里の芝居をして、坂路ふゝろつゞへる。又安
積沼盆川の宿に芝居あつてやうされ。權は地ふゝろつゞり居り。江戸よ残
す妻のりんやうとて、乃に彼敵あ。安達た九郎はきとて、忍かずふ
けどもト。城の旅館とくのへて、小平次が逗留の地盆川の宿とくろじ。
芝居のちてふゝろうらふく心せれて、只獨夜と月ふつきて、下りりる。心みけ
とむだり柳道の辺の清あもつづくにえり。白川の園阿食隈川

もひきく歎て。表をといどり。小田川の高化地とこえをときて、ま帰故もと
うやうわげ時ときも十月のうちよがされば、ゆきの旅人たびびともまれくあてこゑ。
衆の三更さんこうのうちよされば、更またれ人のけんけんあはざ。只群ただぐんとまよ、孤雁こゑ天あそふ貼はりてと
ぶの、よくぬくぬくどぬどあひあくつけつけひいままで。りのとくすにまきゆゆ。
そぞろふ寒さむ風襟袖ふくいんしゆに吹ふきつれて、ちのびびがく。餓ゑふそくそくて十日じ乃
艱苦かんくとくり。せきそくそく通とおぬ急いそぎりぎり船ふね。枯尾花こらみらうひなのむむぐらうら。像やう
にうごくうごくとくええ。忽然とうらめく一隻いつせきの狼わとぞく出だて。鼻はとあしあしと牙はとくく。勢いきひ
をふきして跳とる。左九節大おほゆきゆき。脚あしとふくくて逃のがりる。かく
狼わがあまつきて逃のがれが、今下いのちとままおをり。なまくまくとままうとう。十
余よ逃のがのびて、あととくらうるるに。狼わのとくらええぞうぞうととうう。十
にあるうとおがええ。渕ふちの冰ひふ咽ののととうう。息いきとやまとりの肩かたとかけ

くの色のうれみもづき。かハ彼と逃去時。わざてくさうやくくえ
りのき。べし。ものうちふは衣服のそろへが一の旅費とほみやれと
いふ。まびうこ
とども。東波筋にゆれて捨ひきば。又狼のまゝにうゆく。運あけきを
令下とうへきよともあつべし。むーの旅費。衣服。令下にかやべき室か
あくど。ばきよう毎川の宿ゆ。不どをうちざれば。腰の一刀と賣てあつた。
ゆくがうと。ゆひふぐも。迷街道にて宿とゆびやと。四方とくづく
るふ。ばきひねて。乱ま迷離。轟轟う。廣莫う。孤鬼の踪あるひく。只一
條の徑路もきりとぞ。へのあとうもく。まひのびと。枯草と折りあて。
むすもくと。索りに。像みぬ雨。さくさき。暗くとて東西もくとぞ
き。只みて。おきよ。芦屑頭巾と。大腰刀と。あじうらあ人の賊
ひとじんき
人乱草のうちと走る。一言といふ。左九島。とて。衣服腰刀と

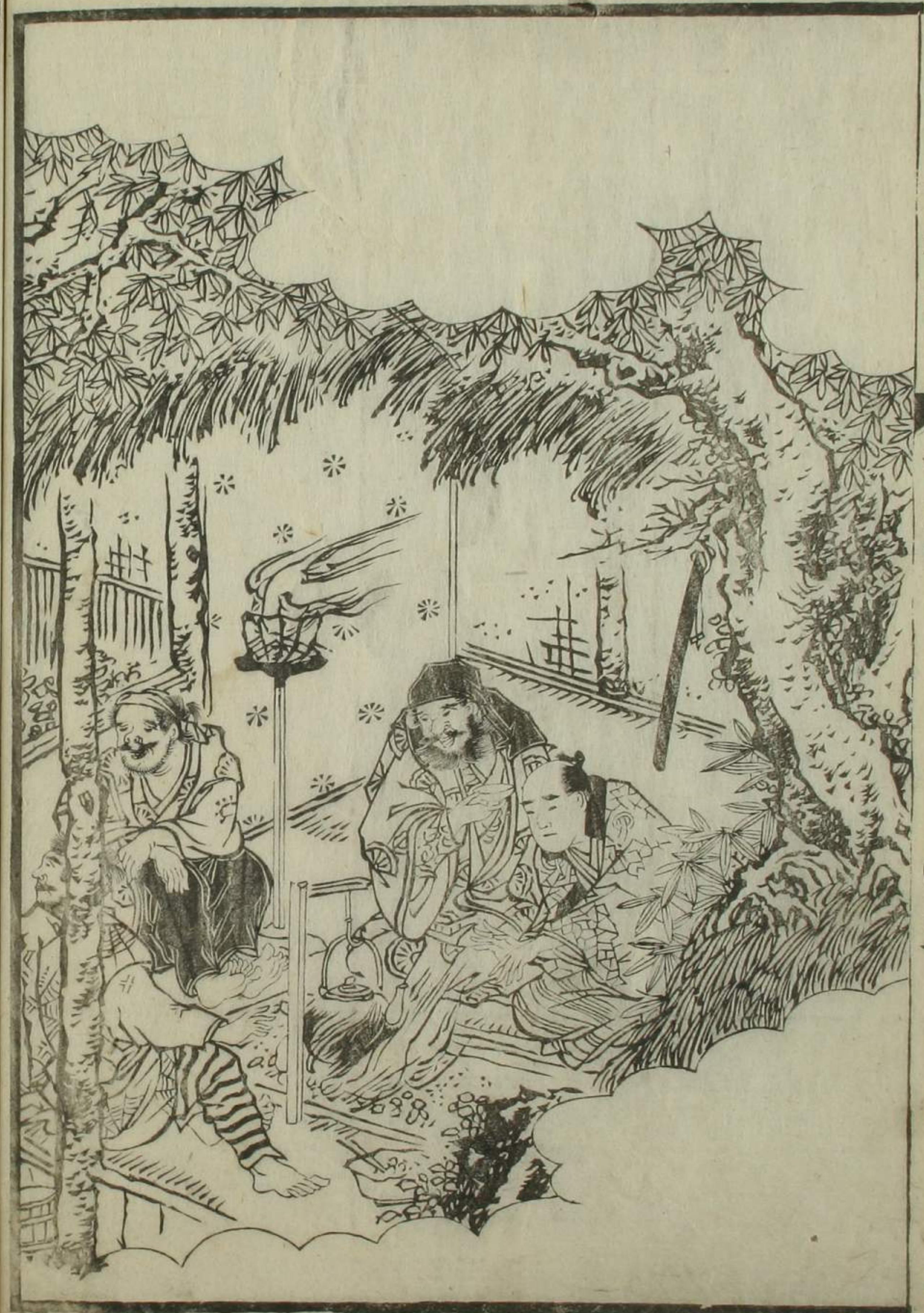
うばひ。赤裸ふうて高す小みにくろ。一人の賊左九郎が背と掩腋
とうであの腕兩の脚とさぐり。眼口耳鼻十の指までとくらへあくと
あえてば老衰もそゑの痕どうす。又き活肉ぞとひつ。あ城
とよろくべらまかてもんとてゆ。憐むべし左九郎へ三途に迷ふ鬼
えん。悪鬼羅刹めくられて。閻魔の腰かむるに異うべ。とても彼等
に敵らることあくび付ぶ。只死生とえふゆせてひれゆたぬ。かくて三里
をうちも去へとちりよ比。むろうき林のうちくろ。一筋の竹の走りをうかごろ
に閃くゆき。而以て兩賊足ともやれてあいとそりたゞ被ば。左九郎ハ只
中に仏と念佛と死と往のきうり。正是猪羊屠宰の家に入。一脚踏
まて死語と死とつるくびひて。ひとあやしくぞええから。かく
とぐれ林のうちふううれば。寢ふ壁の骨あふれてうちうろび

うる破敗家ありて。うくやら葉にうぐり。被兩賊左九郎と
やくらうきくまん空屋のうちにてまじゆき。彼衣服腰刀とくまきす
正屋のうちふりぬ。左九郎ハ今も殺さうとゆく。あくらく
ありて。前の両賊のうち一人明松とくろて前ふくら。賊の頭とかばー
くて。色黒睛光月代もくのび。腰あぐやみて。恰も繪よけり。張飛に
いわう大男。もた刀をかび後かづて空屋にまじ。小賊がまく明松
とくろ。まぐら左九郎が面とてしまそ。大にせぎ行き。汝ハ裏右軍を
みてへうれくとくよ。左九郎ハ我弟の名をよびれてゆのくとく。
世大男とくろくえうて姿ハ前とこくうとくべども。まよばうか
ね。見の裏面を承るをとが。地獄みてはあいするうらへ。さりよ人六兄
えくよ。殿みてはせいかどやとく。まよ承りへそく。我今下の者が



本腰刀に刃おがえあれど。あやしめせひて夏に来りて見
しれ。果して弟きり。あやしくとひつらそび。まもはまそそ正
屋にさきひゆたしが。二里余の道と赤裸も多風みゆき。渾身
紫色かゆり冰のごとくにきふれば。いそぎぬ抜ととひて差せ。炉
火のうちにて本の薪を取て何とし。あくまで酒食とある
けし。只延解するゆひと。漸くうちにきりまことにむ
いて六年以来もとづき成まど。いゆきゆきもひーとゆきもお
りし居に恙きやりてよろこびゆくととくべ。雲平房
列から安西喜内母ふと殺。彼地と云々とて後安國小
通なり。剣術などとて所と方とちぐ。津波の海辺外ヶ浜小
島をもぐり魔頭ニとつよ。ちぢらとひとつぞくひくうり
けとば。左九条ハ今ぬ名とて。せき居の鼓かくす。釜川の嶋
芝居ありて卦くとて。世衣夫婦抜と狼ふか合て包と船。
乱草のうち小ゆりて両城ふくとれ。そと庵とぼくまにまう。ゆひ
かけざる射ゆふ。まごひれをすりとよろこびぬ。雲平までいそく安ハ余
づき人す。其宿ともうりて。我下の者乃所あす。我若
一隻の狼とやくひゆき。食と減じて歸る。下の者小もきせ
てねく御ふか。旅人ふ狼とくらうけて嚇。主因に

きて。づへ小賊の頭と。卅八ハ街道ともうること三里人室す。そ
四方二里を同都て茫茫と廣莫とて。更に人の往來あらず。外ふ
只一軒ざく家うれと幸に。此を云うる世空家はうびて。かくれ
候をもぐり魔頭ニとつよ。ちぢらとひとつぞくひくうり
けとば。左九条ハ今ぬ名とて。せき居の鼓かくす。釜川の嶋
芝居ありて卦くとて。世衣夫婦抜と狼ふか合て包と船。
乱草のうち小ゆりて両城ふくとれ。そと庵とぼくまにまう。ゆひ
かけざる射ゆふ。まごひれをすりとよろこびぬ。雲平までいそく安ハ余
づき人す。其宿ともうりて。我下の者乃所あす。我若
一隻の狼とやくひゆき。食と減じて歸る。下の者小もきせ
てねく御ふか。旅人ふ狼とくらうけて嚇。主因に



て。旅店あおとうぐちあひことぢたき。今夜も下の老宿とよそ
街道小出いりで。汝が出合あひは是これ。もー運うきてさばく狼の餌わらくさき
に。ゆゑかうしてゆきう。又男女にさばく渾身まごみ無む病びやうれ者ものといけ
どりて賣うつふと所ところあり。これこれはおにいさんあることふて。一席せきの旅りょが
下しもの小城こじょうを汝なといけどりへ。それからうるうるする。
我汝なとこうらうらなど小城こじょう等らにゆゆをかまそ。此こ日ひも彼かれと賣う
ハまじ。此こ余あまの死死とさとくまん運うきつうれすよとからうり小出いり。左九郎
がまどくましてましり。はわはしもあ人の小城こじょう敵てきり奉まつね。一人ひとり狼
とひき一人ひとり包くわと肩かた小出いり。がもうていともばはす速はやてくく仕合しあわ
きり行ゆきゆゑを。人ひとがいそそののりよ。賭ぬけ錢せん也よ利りと多い好すき貸あ
いで何なんぞ。今夜よもましめめのあをひきき。小出いりも包くわの裏うらを

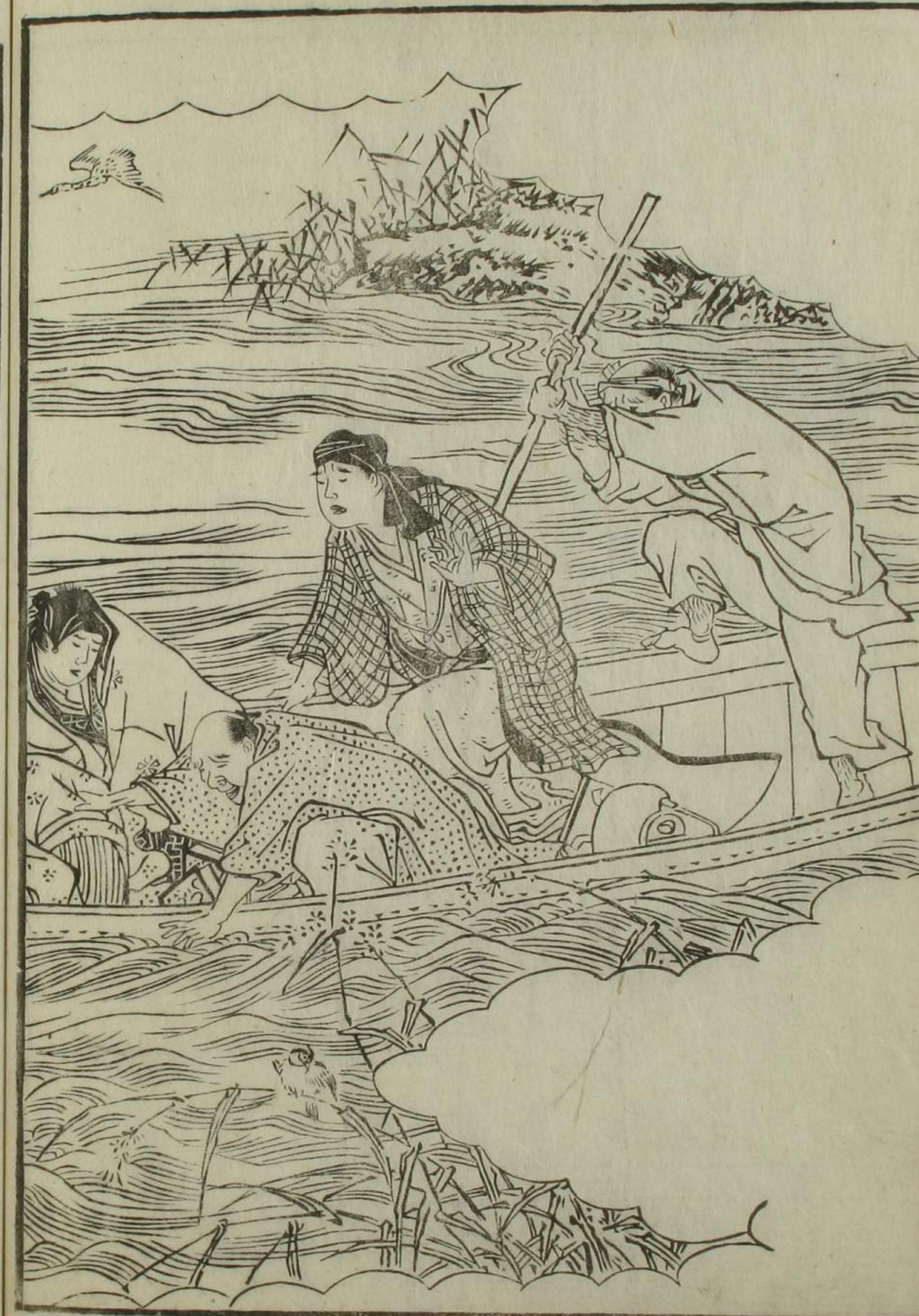
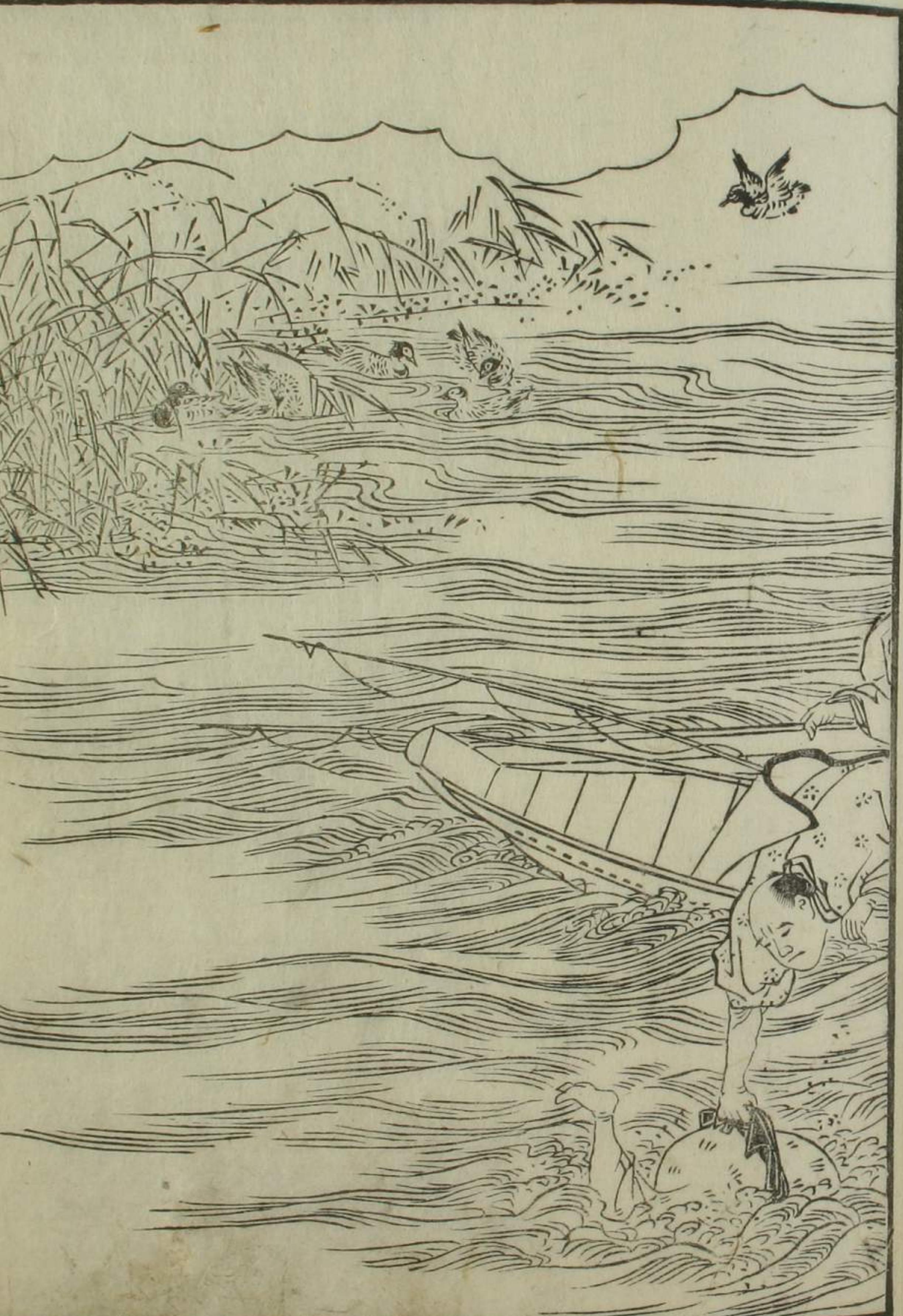
。かくしてうろこ酒さけを飲のく。狼わらと門口もんぐの桔き
木きにつききて裏うち小出いり。雲くも平声ひらこゑとかけ。汝なもハ夫婦ふうふ假まめて包
とひきうやえぬきて。ばあ城じょうを行ゆきてももりとさざうるをそ
れれゑゑとひいていづくくれば。雪ゆき平ひら左さ右うををたたかかにに。左さ
右う二人ふたり小城こじょうに人ひとが、右うのちぐぐふううびびをを。再また酒さけがあある。む
くく數杯すゑとくくむけてよみみり。世よに人の小城こじょうハ胡ご猿えん五郎
鰐わい八鶴はづか二郎じろう。鶴つる二ふたひて。よみみ海かい賊ぞく。雪ゆき平ひら大だい膽たん強きょう力りき也
て。よく劍術けんじゆ小達こたつーもとひて。そちて頭かぶとと。おのれらも下さよ屬すく
ざざも。かくく冬ふゆの夜よのちき。兄弟いりいりつりや酒さけ小出いりて。よ曉あけ
小出いりくくれ。左さ九く郎ろうハ再またああべーとひひ。別べつひひ。

てゆきり出んと。雲平一人の小賊に食ひて。街道の土口まで
おこなせり。左九郎心やもく街をみて小賊とまゝれ。左を
急いで。その日の午後。益川の宿へゆきつまて折よどまくに。
芝居へまどり。近日魚行のうきし。たもうそび。一堅のみ
者の旅宿とぞぐにて。小平次ともどり一堅の者ふあひ。頃日よりひ留
まふ。ふうて。がのくと。的にあれ。神がいくへぬのせき居みやとひれて。
さすへうりんと。まきよーといひてとのまね。幸小平次班取すり
られべ。がの居主小かくと告て。左九郎心と引合ひに折よく繫方を
えり。小ば迷ふうけをきて。前方のうち小ぞくもくる。ばほひつまく續り
言ことこと。海道下り。新發豪大鼓。佛舍利。谷中六方。よく
らむひをど。狂言さて。余小糸頭のうび。狂蔓とつまものか

けとべ。立役ハ自襲と茶筅にゆひ。笠帽子とつまのもとけとべ。安形
鬼絹のきの四角に松の枝と茎。やすら帽ふとえづけ。それと以て月代
とくし。そのゆねひとうと。夜服ハまぐて本綿にもうぬのあゆう。江
戸称宣所の芝居をくわいかくのごく。されば。田舎芝居の廉略か
るよりハ推てかうべ。柄ハどく。せきあそび。まうくろ。兩天つまきて
休日ゆい。常々旅宿にあつて徒然とくべ。能優の事すれば。お
藝ハ少く。おゆく。あれど。ふきりとばく。おゆく。只酒食とむきび。
山ゆく。おゆく。あれど。ふきりとばく。おゆく。只酒食とむきび。
甚游甚氣と慰めて。近きに安積山。安積沼。葛の松原。住ま
る。游幕もかく。かくへ。と見て退屋うらと。左九郎心とくつて。
小平次小むし。かくよ。おゆく。近き小安積の沼とよ大沼あり。

奥サトーとまく。サ一画ヤシ向東。彼不_レ小船をうちて船舟と
せんじた廢アキミあらんといしてもとも。小平次ハ素_レ船ボウをうし
大にうろこび。我はタにむつぎりとつひつ。人といざういす
彼不_レ小ゆんとそと。がくにうもう二人以上をもじして。我等
人のがるとまーん。彼沼ハシマ少_レ主_ウあうて魚城_{シマ}と。調_{アシ}とやう
船ボウとそと者あ種ス必_レ恵ハサカタこくへあよとく。蟹カニハ別ガラもあ。や
物モノ候ハシメへすら玉タマへとひて。テモ。左丸_ス家ヤマてお第シテひ。ハそち
うることゆく。このどう足下シタマの食エフと魚シマハとて彼沼
ちり星ハシメ人のまうまうて。まうまうのこ。里人ス怪ハシメ。他國ハチクの人スの
ミ怪ハシメあぐさあくまう。それ畢竟ハシメ里人ス。彼沼ハシマの魚城_{シマ}他
卿ウツのくふうせきハシメとありして。嚇ハシメを言ハシメ。行ハシメの怪ハシメこくわすん。

幸雨エムシもやみね。魚シマも餓ハシメて。うく。泊ハシメ小_レかハシメる。やう。
いざくとくやまくとひて。ざくとも小平次ス。其余女歌
の右近源二立経ハシメの多門庄三説經ハシメの天滿八助ハシメといざ
ひ。さて五人被子ハシメ小竹背ハシメのものとびと泊ハシメととむらうて。がの
沼ハシマ不_レそら。小舟ハシメとやまとて。おかしね。押安_{ハシメ}の宿ハシメとよは。みうみ
の安_レ候ハシメの宿ハシメとよは。さくさん人スふとまや泊ハシメ。あやとまやくす
もとゆくちと根ハシメのいそをりまれ源ハシメふ生ハシメひけん。すと古歌ハシメもとまよ。みち
のくち名ハシメき名ハシメ不_レす。此時までひうき大泊ハシメしが。泊ハシメいふ
れて今ハかくどう強ハシメ。かくて五人の考ハシメ形中ハシメうち四本ハシメとく
そくに。若ハシメかく安_レ候ハシメ山ハシメと一眼ハシメにえあげ。時ハシメもあくべれ。まよ
して。雨後ハシメの景色ハシメいふゆきうて。余ハシメとそだとうがごく。花



久。菖蒲草、燕子花のよどい。かくとて桔梗す。一面
新を絶して、裏の山に雲もさざへずあり。いやしき。鳴鷺
の水をくわむ。かくす。心うれし。おもとまづに月とようこむ
や。えもしれぞ。好景されば。大に魚とちう。酒のよどき
に舟とよひて。彼處小竹筒取牛。酒くみうちつ。酒とく
ごり。左九郎がつ不とぞ。もぐらのまんあゆこの奥をぶ
られ。後半酒のひふもお忘れ。只酒をすくふとくらで余念
きぬ。小平次大きき船をぬあげ。魚船中にとどると。
あくもやくもよ。進とことされといひて。えさとぞり。小
平次あすきて舟べとよき。うござれうきて水中に
撞とせらうりし。ばく騒とされとけよとひてま

ぐ。左九郎猿臂と伸して。小平次が帶のむきびをふく。ひき
あげんとくろに。帯へうけときれて。すふあり。小平次の水底小
舟みね。皆くそくはんとせんとあひて。ゆく。權とくらて。あかく成
かた。さくさく。じどば。船へ沼のよどき。更ふ水かく。ばんとも
うござれば。ばく面色土のよどくに変。世。沼小主あひて。魚
かくすむとよふ。よど。へきる。それへ妖怪の訴ふ。うべと。ま
まんおき。くそく。沼のよどき。あかんとて。急ぎ船
とくそく岸に上。水練に達。一者と二三人をひて。水中を
あるく。おきをり。屍と得。よとがまし。妖怪の所。あ
き。とよし。左九郎等四人旅宿に泊。又あ中
とまぶさと。がくちうも三日以上より。よく屍とよし。

今へせんをばす。花脚とすみて江戸に告ぐをべとお議
り。左九郎腰刀と抜て已に自殺とすとし。驚き
へわ氣をあつらひてゆどむ。左九郎吐息して死れ
氣せざれど畢竟彼とそもて彼西より。あとえりやうへ
我あやゆう。戸小解りて彼妻にあひけんのひよけあん。
象自殺と小平次が死ぬとあひ。泉下にうて朋友の信
ゆくとあく。跡のこゝとあひ。足下にうて朋友の信
きや。やうぐらやうくええりと。まく立ちかうて斬く刀を
もぎく。同船あつて二人の者がうぐいり。小平次が水
死へ自あやまちうるふれ。足下のつみふあくと又足下に
うとも小平次再生をぐくうもう。彼妻やく我をと
にうとむくのあやまうふれ。足下死ねりが我をも口
うすれ。さて飯くがくがる凶事のひでさわくも。ば娘
怪の所あうごーと。ととく飯くととくうり禮。左九郎へや
アカとおき。とく嘆息一とぞあくらり。やあうてた九郎
ひうり。ちくうへ花脚とやとよにサトグ。我自江戸に解
彼妻にせりと告て。そすれ追薄公車をもへとくむべ。片時も
ちくまうんとつれて。此日の午後比ワ往を吉とらいで。この
事へみた九郎が奸討みて。自殺さんとすものらくに疑ひとも不
知。彼へ朋友の信とあはれ者すと。暗に譲るこそ恩され
かくて左九郎。ち日暮に雲平が隠家にうるぬ。ま車へ



小賊もとそしに酒と飲て居たじよ。とくらふうりふ入。計ふり
修ふうて我日暮の望とくぐること。偏是兄とくぐらへゆるや
えすとひて謝。それば雲平笑ひて是の小末行のうぶ
がまゆあん先くろまて一盃とくむべとひて。禮杯とえぐ
らーり。折左九郎小平次が妻お嫁と亥通。おとねて小
平次とおひお嫁と我妻れせんとすし居。小平次ぬ國
駿日逐苗とすれわめ。縦船に於て毒殺をぐとくみ。毒
くと懸すてあは小口しが。せりひきど雲平にあぐ合。也死
のつでけり。公渡りに毒殺せだのらくうぐいとくべ
て。別小一計とまうけ。雲平ハえま水練の達人きくへに。下の
者どもへ原海賊もて水中と陸地のごくれり。又徒きれば。雲平二

人の小賊とあくび。安積源の水底にかくれ居て。左九郎が小平次
と水中かくせとくね。水底にかくられてしまう。屍と
して跡をうくる。それ後日左九郎いつと妻れもく
のうぐる折とて。計とむらへーうぐり。おもくくわづて
左九郎がいく。小平次前日使布里みて。おりひりぬ金五両と詮
筋中あて人に奪はる。おもくくわづて。衣服の裏にねひこもあまーと
人の傍ると暗にまわ。モーちくぶ兄とくしとくらふ。彼が死
骸ハ何方にあくや。雲平がいく。彼の空屋のうちにつれまわ。ゆ
きてあくらうとく。左九郎がゆつとく。空屋にゆく。
窓とうきつと月あくにく。小平次が死骸ハ渾身泥よきみロ
う赤き泡とつて箋子の人れとく。お後と探しを黒

あがやと叫びてまわる死も、その声正屋ふきえし。雪平は
弓と矢をもつて走り来て立た。たかをめへ小平次うて骸
からげぬ絶入て居らし。遂引記さんとそんへ。小平次が死骸もそんへ
記してゐ。あゆもとよくうふを。小平次がゆゑて左からりくひと
あがり着く。これとすだもあさんとどもにそよしおがときたもとやてもか
んとそれとも。ゆもくとあらげし。雪平氣はづら刀とぬきて
小平次がよろびと斬放。小賊とよびたたかと抱せて正屋にうや。
醒薬すくわくれを漸く甦醒りり。まくらをかくす小平次がゆくび
左九郎がゆくびに残りて。ゆもくとまくらがれ。やんきく五つの指と
ゆくまくとも。やくくこしとすだとくねたかをりんこちもみくさり
のも。小平次がゆくみくろ眼がのむちもみくさり

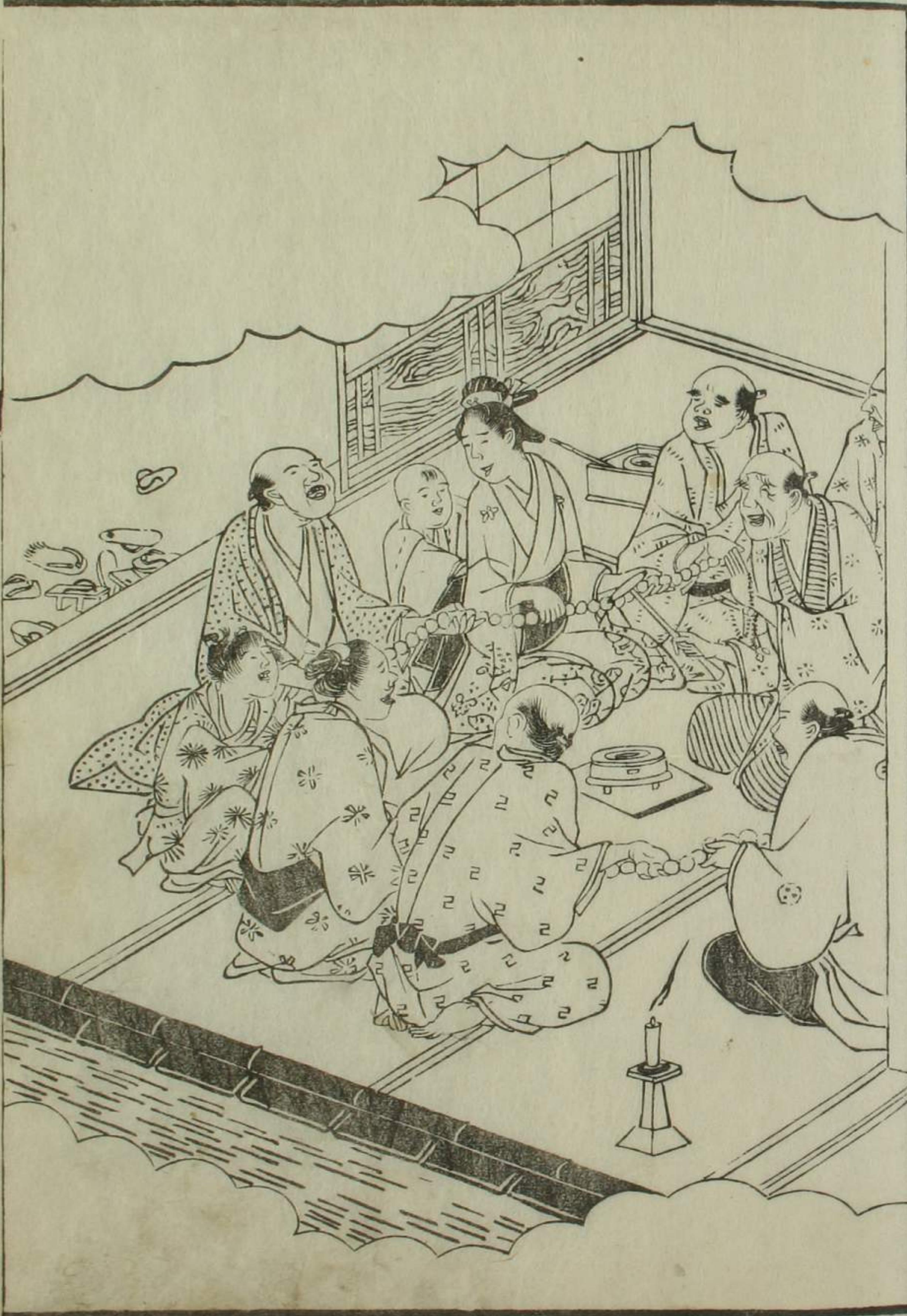
てうちりやかくとつて。雪平えんぺいと笑ひ。汝ハ膽きらきらのきらきら者ものか。彼奴かれが一いつれううみとみとも。何なにのなにことことや。必必ず膽きらきらととどどることことされられととひて。小賊こまどり等らに令おす。屍しと家いえの後あとを左さのうちうちにてとせ。斬放さばきよ。縁えのきへ被は糠ぬめ小こああててくくむ。おおーも遠ときの音おと声こゑ耳みみににる。夜よ四よ更ごののうちうちからからしげ。ままく房ふ間まに入いて歌うたう。かかてたたかかハ。次つぎの日ひ未み明めいにに殺さままして。江え戸とふぶけけり。唐とう山さんの左さ言ことよ。人ひと可ひ瞞ま天てん不い可ひ瞞まととことあり。左さ九く鳥とり等ら毒どく惡あくつひひ報ほう時ときああべべ。且また次つぎみあるをを伏ふく見みよ

第八條

小平次寃魂苦妻夫淫婦事
并五指五金終有報事

かくて左九鳥江戸に飯くり。ととららに小平次お家いえよそ。晴はるにに彼かれ妻めが家いえ

ととくくさんさん所ところににゆゆかかて。旅た中なかででゆゆりああく。雪ゆき平ひらににららぐぐ合あく
うちうち計そととくく人ひと安積沼あさかのぬま小於こいてて小平次お殺さーー。おおひひしきしき金きんススあと
得とるまで。始はじ終終ととそそにに後あとれば。お塚おつかつづりりててよ。小平次お旅宿たくく宿すくす
病病とと得とるるががーー快かききにによよくく人ひと小先こせんざざして飯く來くーーととて。瘦衰すいしやくて
昨夜よ家いえに飯くり。ととく草く卧くーーととて。其その候まことに房ふ間まに入いてて附つきりりががねねも
食くごごて。今いま起お出だごごととよ。たたかかままて。ととく怪あ事ことあり。彼かれ不いれれ
ききとと時とき裏うちよりよかかわわくくよよくくびびととよよ出だ。裏うち風かぜととむむああけ
ててよよううよようう。枕まくらひひててよよううととよようう。裏うち風かぜの縁えのきみみけけよよええの指指。ととくくととここぞぞれれ居あて。屏びょう風かぜへへおおびびくくよよけけ。裏うちふふ人ひと影かげ
ももええどど只ただ卧く具ぐののううようよう。一團いつだんの陰かげ火ひままううびびで引ひ窓まどとと越こて



菟去ぬ。彼こぢれゝる指ハ肉腐て臭氣あり。死して日と寝る人の指ゆさあつり。左九郎ハ少と見るよりも贍と能く眼と因て伏向に卧もお塚なりと贍のふとんをすれば。がくともかきしだ。初ハ昨夜飯来し。小平次が寃魂をあつらう。しおうの怨みあくび苦あり。今更に何の聲くことあつんと。左九郎が方とえうつ。祠と廟をつぶさ。左九郎も彼が丈夫の志にそらて。やむとかす。雲平が隠家とも怪事あらしきと證て。ば日へ且別まね。初前に五川千々姫が養ふとかじ。小平次が鬼子小をあらは。また幼年されが用にとど外に小平次が親族きる者むとくもきれを。左九郎お嫁をときり。追薦仏事といひとて。人の疑ともかひ。中陰のことをまし。媒をとる。小平次が家め入つてお嫁と妻とす。兩人日來の望をとげてようふことかまつり。それから後ハきりふてあらまどきことあり。毎年もくらす年の年もくれてあらまどき年とし。小平次が寃のゆゑ終りにも。や忘きてくじり。一夜夫婦房間に眠れ。誰とも知れぬ男。左九郎とお嫁が病る間をたまうて卧て。左九郎偶々心病ふつけてあやしく見えざりんと。うらうらに。お姿は見えどきり。それより後ゆるごとまこと。或ハ二月に一度。或ハ六月め一どある。左九郎妻の心病疑ひ。独胸にらてふとつけし。後ゆる毎年はうす。心病もしく疑ひとひたり。我妻人ともち通し。家ゆゑをうかみて。夫と心のとむとむ。彼原和と交通し。がらじてま婦とあり。うちふ一歳とむ。に。又別人と不義をすとこと。もう一とくきた淫婦あり。計と

以てたゞ、ふとぞめ。は仇と報ひと。心中にうき。れんを
ゆるまび居りるが。衆人のりふて酒とそじ。ひきし浪と踏く
よて家と飯りつ。時に二更のころやいあても。櫻とすか。
ちよれば戸とよきとぞ。ゆきうちんと。門へとぞむおーも。ゆきの
垣と誠てあびひる者あり。暗殺事ておのあや色ハ見えざれど。
もやうてこのごろ妻のりとて。身と葬まされば。今夜も。彼奴を
に報のふと公私とぞべーと。おのれも垣と誠てうちふ。暗所にて
身とぞもて窺ひに果して。假者房間ひ。妻とぞひに附れ
ばだえあハ酒氣とやびまく。には。光景と見て。忽怒を歎み
起り。腰みおびとも。一刀と抜て。四肢々々れく。斬つけら。妻へ縛まき
目を醒。賊わうくとよびて。あくと刀とあくとあぐられ。

急ふつの指とくとく。きれあら。鮮血濁とぎれて。一声あかやと叫
び。づけとくと倒れて死つ。おまへとえー若ハとおまく姿え
うせて。只家棟に呵くと苦よ声して。あくび音う。ねハ我聞ふ。おん
夫くとくも。小卒次が冤魂とてありしき。たぬ島ハ夢の醒と見
くら。がととく妻とぞとやく。うれやく氣りつとおとと
も。日未膳ふくとく。女されど。妖祟のよき心氣ふうづれみ。
世時よう心乱。さあぐのこく。ふくらむとぞねひきり。ましやくと指
のあく漸くお腐氣力。日くとくとてつぶおせすれ。あくとく。登はく
種てとくねづれど。おハニ吏のけくとく。若もこと。每夜す。かく
て。絶ふ余下とくとく。妖祟とおぞぞく。おへ仏神とおじふ
もとと。とききの人とあら。百万遍とくとく。ばうと仏と念



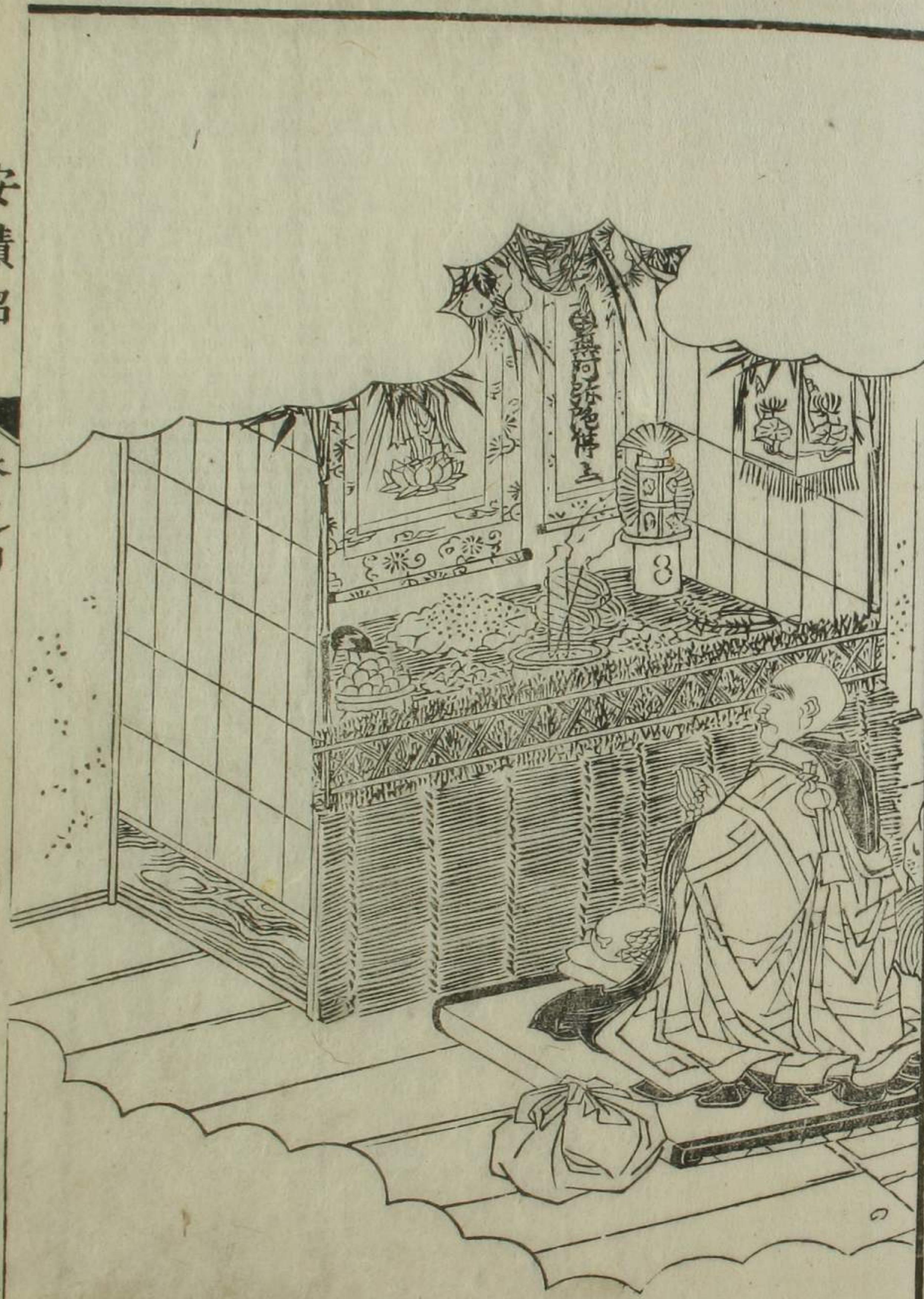
ト。ふはとすこしてこそぐの行禱とさせども。病をうらむ
驗き。不とぐあやうござええぬ。ちよて一日彼水垢つきてえ
苦き衣服と若く一箇の祝神鈴とくじし祝詞とくえ
て。門小もしものうちとく。左九郎あみうま速去とくしてお
ひせんとくらぶ。祝神耳みもれど。頭と檻てくもく家裏
とくのく。左九郎あみく汝人の家内と窮へなれのく
りく。速に去ざやくあくねつゞも。うくまつれど空窮へとく
の如く。へゑくわやく。汝我家とくがくハ必相脚頭ゆきて
賊とくべき底ふるやく。拳とうりざるま速去ざやと喝け
きば祝神つうと娶てく。我は家と窮へ家と相せんがるく。この
家のねへかうび陰鬼と犯す者うり家相へあうれてあく

くき。汝りゆうぐべん小サギアゲ。あらん我と賊ともハ何
のとくとく。又家内小妖氣みちて冤魂の妖祟ゆ。汝を亡るこ
とをくじ慷慨ひぐりくとひりやまんと。左九郎大に驚き神
そみて心きどめ。恭禮とあくひてく。そぞうきく方と知く。
されのことくかきしつ。偏にゆくと。今あるひしたよがひど。永
家小妖祟あり。妻うりのあれ苦しらられて。已に令下あやつ。それを
そくづき術あくが何とぞ施しゆくと。祝神當てあくと。ひ
か前れ我と賊とも盗人にけの靈塗あつてくと。おいて
只よとつみて。滅そとけふあくとひく。又去んとくと。おいて
や妻の病床小いぢりて。却くもく救ひと乞われ。祝神今ハ不
便あやむりいりん。すくうけひきて。病人と相へ左九郎と相

さす。ま帰されまでのおもひは甚よりうど。生唐断。死雷断。き
つの國津罪と犯す。ま最も最と悔て汚穢不淨の志とす。
一。清淨潔白の心とをきが。方ふ一つ解除べきをあんじら是下わ
るにやうび。寃魂然と化す。病人の命も年も旦夕に死す
ね。四と八とハ戒神石みかひて崇む數うれば今日より四八三十二日
間昼夜戸と閉。身心ときよらうてつれみぢうば。九死と出
て全かん。一時とあやまつとも脱るべくぞと。がく教へ筆と乞
うて口のうちに祝詞とまうり。病人の宵ふたりの神号をうた。又脇
うゑ庇そちうる神号あまうかしてあく。ば肴と戸毎に貼し。薦函と
悔て只一心よ神門と念むぞ。まうるとうれしと教る。左五帝かられ日より
び。奉宿を取て謝られば。祝詞うけど口残え未一つと枚てゆく者。

さて神符と門よ貼窓ふ貼つてて守りりうが。その和三文の紙をもや
き声にて。ま秋ハとうゆんとあひ。けき奴うへよみ。符文と設つよ
とづかきて。まうび声う。左五帝ハ終夜妻と守り。今やまうべきと
魂も身にまうぞ。まうく。肴ひうれいがちからうれして。祝詞が門と寄り
じ。ひまう神門を奪ひてまううざしが。秋ハ終夜風あがふもごと。あま
つまうて。まうみ夜のまううに。四更の終夜の紙尔と赤ま光り
て。あみやうと奴うめを貼つて。まうよおまきと。ゆき。祝せんいと
凄く。左九角ハ毛髮うううに。没えて。まううく死つね。ぬ。ぬ
くと。まうい。うれいがちからうれいがち。て。ば日ひうと。まうこと千歳を
まううも久。寃魂ハ安あに家とをぐ。或ハ屋の林よゆび
ていね。声秋まうに凄く。かじて三十二日とつと。鳥衣ふすうぬ。今へ

一夜小みづへぬ。今ア秋どんて脱るし。妻のいのちとくらべへ。
左九郎こゝに牘を守りて。やゝ又の天をくぐとぬまうねれ
た。今ハモコ夢の醒よかすひとう。モクルくんとやもて。癪あ
さう引窓とゆくへこわい小門とササリ。和ハいまぐらく。
月ハ中天ゆく。影徳あり。ひやうき風とあくへつきて。一團の霞
火船入る。とくろくが暁風の裏に阿と呼ぶ声耳とほしぬえ。お
びえビ尾后み掃く。度々こゝ妻が死のうへこそ。ハシゲハく尾風
やのけて。スル。が塚ハスヌぞおりぬ病に腰もねば避逃さうへ
き。ハづくに陽る。さきほねヌモゆうねだ。ハネキツヤと或ハサヌ
武ハあらく。ナリ穴ととてこそ彼女とアラドヅクリに。窓やが
壁に腥く。血をき流きて地ふつよ。それが屍も骨も見え
ど。月あく。小ア竹林のほぬにわゆ。より火とくげて夕る。
とけもき女の髪毛をくらひて。外えあぢうのりものか。
浅きくもゆきう。まにまとゞも阿レビ。承あけてをき
と探索もども。づひ小モ跡えきされ。左九郎かる。も移ること
えびく。おに追薦仏事といとく。さりく跡と吊り。がそ
ゑく中陰となり。が塚病あ係りて。ア武ハ医師をむく
系代りと。武ハ傍とあく。山伏とやもし。加持祈福をとむか
や來経と費へ。されば。小卒次が強一ゆき。衣被雜物あ不
き賣る。今ハ家に住ぐ。兄吉平が陽家にゐて。いふ
ものとある。と儀ふべと。又妻をとふ。少一強りうち家財
厨の雜多まで。石く賣て金五両みく。日陸奥みうじ。



とん度して。空屋のうちみどり。時にも盂蘭盆のころ
されど。やめて妻の新靈へ家をもよび。空屋の隅に空
きの靈棚とまうけ。僧侶もよび。便もよれ。びより會仏
とまきて居る所不徧參の僧とよそざる經。傍門も立てあがそ。
左九島幸のこゑうちにもくきて。我家か新靈ある。經とよ
みてとみられと乞りし。傍けひておぞく経と讀仏と念佛と
ち。家の四角と見え。下の金二日がせどしてともねぐ。ある危あはく。左九島この
やどをさぐ。せうすにあひて。大れんやしきよし。左九島この
まくはせて離るき。金と腕と術と枚ひ多くとをとくに
きふ。僧がよ。足下の金と枚ひ多。足下が金多めえがくとるよ。宝
き。金ときよくある白紙を令の数をねねだ。左九島
ちうぐ他國にうらんと思ひ。又あふげどく家財と賣て
空屋をうし。金多めあがき。宝へやみて。塵ぞうのぬもか
。只安小家財と賣らむか。の令ある。我今の身にあらず。
世主令あそび。金多めのなり。僧まで。そしまたよれ。左九
島。金ときよくある白紙を令の数をねねだ。左九島
ちうぐ。小判五両と白紙五枚と。うて僧小判入りし。僧これと
ちう字似と見て。口のうち小咒文とよへり。小判のこゑ小篆籀
のこゑ文字とよ。あづ白紙を封。その人に又梵字と云
あふ。足下それば。懲りて。まわニ日が向家とおぞ齊忌して
はあひべ。二日とがうらふ必要と云ふ。かくことすれり。

ひりくそれハ術じゆすれて忽一余ごくゆとじよべーとくく教きよたが
くとみてうけとあら。米べい津つを以もつて謝あやうん。傍わきまま辯べんして
うけどつひ小出いのしうちうね。左丸さわるゆく旅りょ傳てんのこゝとば信しんト。右
うおときうち精進じゆしんして家いえよこう。彼かれ包いは令めいを腰こしみてはくと居ゐ
まん。何なにあやへんすもあくて。已それ三日さんじつ五ご小こをすくふとすも。
不ふどく今いまをかほひとくらしてうづく。彼かれ令めいを取とり對たいとま
てアラふ。二つの弓きをうなれ令めいと入りはいりやまね。左丸さわる大おれいどづき
袖そでハ彼かれ僧そうハ拐兒まげのこと我われとめども今いまはうくちうとやん月つき
牙きばと咬拳かみこぶとあまうて腰こししも。行ゆ方ほうの者ものもかくさればいくともぞ
ることあ。いとぐに空うつと的てきにふくものくき。彼かれ令めいをくわへ陸奥りくおよく
ざま踏費ふきふくま。家いえハ空屋うつやとす。されば一縁いつえんふかくがまがま。

じとう。せんそくもよきし。人のりそんゆきて合あ力きとをりそん。それざに
うけむそ。とくぐぬ跡あと不忍池うめいけのわうそ。偶うそ彼かれ賊賊僧そうに
いであひいそぐくうそしておのれ大盜おおぬしとく我われとよそもそて
令めいをうそよ。今いま速はやく今いまをりそば柱はしらてゆき。りある
らぞは官府くわんかあてゆきて。罪つみとそそんとまうれば傍わき大お怒いの。
如意ゆめいとあげて脇わきのゆうとちくうれす。左丸さわる身みはうくとがくうれ
池いけのきく尻居しりゐみ撓うづくとくとくうづく。渾肉まんにく泥づちに漆うすてすくと
ひと。又また僧そうとそそんとそそくとせば姿しきはよく仰あおいしも彼かれ
うれ傍わきあくで。別人うりんされば大おに驚おどろき地上じやうじやうに伏ふて誤ちよを賠わる
に。僧眼そうめんと見えよきて。そもい人ひともすくも我われ賊ぬしといそそくま
の面おもてをしきひれをゆく。我われ一喝いっかつとけて允うんまにこよ

とひつ。又やゑとあげて連打うち而しに喫とれたれてもぐらふ
轂。又さんざんえり往來の人それと見えず。やうく僧とおどりてち
しりり轂。左を歩ひゆき打きて渾身おろぎれ。やうく家まぬづき
まぬづき外うるぎ。もは夜三更のうちより大蟻轂。やゑあて打
きうち胸。まねまくにこみかゝて。夢中にす。それすまて我と氷中
ぶりきれてあとのまとへ。咽とあらへ。あからくやさぐやと叫びつ。あ
き息とくしげにつき。手脚とりぞく溺死りゆく。づひに
立夜ふ更のうちひねひ死みぞ死へ。嘆呼ふきぐ。淫
婦か塚ハヌツの指とまれ狂人となりて。づひふあやと云ふと
昔生たか多ハ家財を賣リ。みあの令は賊憎ふくられ。人よそ
て絶とうし。雪ふに唾とされ。池におちうて泥に溝。あ中に
うち殺さ人のごくくくみて。空屋のうづれ死。家財廢ぢ
ても残らぬまで。都是小平次が冤魂の所あひ。因果のころせた
轂本。うちり。ば後雜劇。み官的。小平次が死靈のわ復をそ
ろ人あ轂。凶怪事あひとて。新劇の人人やうれて泣るるやう。
やゑたつまくあひやふきえど。一老人の説話と遊。導善除
惡の一助。あもとすまきにあつつけぬ

安積沼卷之四畢

